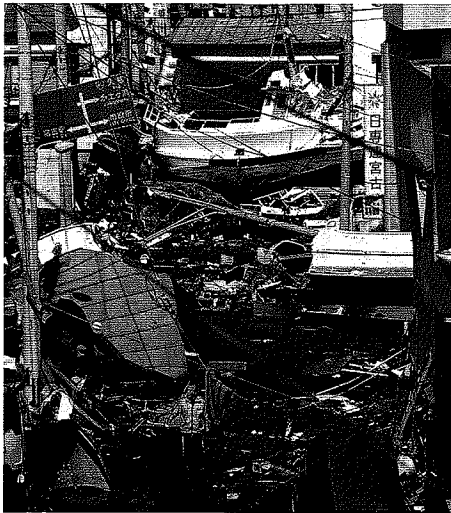


震災復興の祈り (2)

富山短期大学名誉教授 川中清司



3月12日、船や車が散乱する宮古会の前(共同通信社提供)



6月4日、瓦礫が撤去され宮古会の看板も明るく見える(福井新聞から転載)

●巨大津波に耐えた日専連宮古会
被災した日専連宮古会の新聞写真を見て思わず叫んだ。
「おう宮古会だ。ようがんばったな」

三月一二日、船が乗り上げ、車が散乱する宮古市内。六月四日、見違えるように瓦礫が撤去された姿。二枚の写真にはつきりと「日専連宮古」の看板が写っていた。

日専連からの情報では、津波の到達地点は高さ三八メートル。ピルの一〇階に相当するという。

以前、講演に訪れたとき、温かい宮古の同志に歓迎いただいた記憶が蘇った。加賀功二理事長をはじめ職員、組合員の方々はご無事だろうか。

早くも六月中旬に復興イベントを開催したと聞いた。心から復興をお祈りしたい。

●危機が生むイノベーション

「日本人は立ち直りが早く、強靱な回復力がある。この復興に対しては、時間の経過とともに必ず

克服できると信じています」と言うリチャード・フロリダ(トロント大学教授)は、日本の復興を信じ、次のように述べている。(『Voice 一三年五月号』)

・一九二〇年の大恐慌、一九八〇年代の長期間の不況と比較すると、恐慌や失業に加え、危機の局面がイノベーションの波であることが分かります。

・それら新しいインフラの構築に加えて、まったく新しい生活様式が出てくると私は考えました。
・言葉を変えれば、今回の危機はフォーティズムの終焉です。変化には二〇〇三〇年が必要かもしれませんが、もっと高度な資本主義のモデルが現れるでしょう。

・今よりは、もっと効率のよいグリーン・テクノロジーを使った住宅ができるでしょう。

・価値観の転換は新しい生活様式からきます。新しい価値観は、新しい経済秩序を踏まえて形成されるのです。

●第二の敗戦

ジャーナリストの田原総一朗氏は、「私はこの災害を『第二の敗戦』と捉える」として、次のように述

べている。(『Voice 二三年五月号』)

・大自然に負けたのである。私たちは人間のつくった文明というものを過信し、進歩・発展を当然だと思いついてきた。それに対して自然が痛烈なる警告を発したのでないだろうか。

・復興は日本の問題だが、原子力発電は世界の問題である。世界のどの国民にも、原子力発電反対の機運が猛然と高まっているはずである。

・人類の生存について、世界規模での政治、経済、技術などの専門家、民間レベルでの審議や議論が必要になる。

・慎重さは必要だが、後退はありえない。人類の生存については、世界規模での審議・議論によって、文明は一段と高く確実なものになるはずである。

・日本人よ、自信を持つべきである。

●「力の宝庫」を信じて

ウイリアム・シャル(米テキサス大学名誉教授)は、「福島はハルマゲドンでもチェルノブイリでもない」という。(『福井新聞二三年五月二九日』)

・英専門家によると、福島原発の放射性物質量はチェルノブイリよりはるかに少なく、地球規模で起こっている恐怖には合理的な根拠はない。

・原子炉は心配ごとか。答えは「イエス」だ。今起きている問題は、大惨事への序曲なのか。『ノー』だ。恐怖に取りつかれるべきなのか。『ノー』だ。

・日本の文化や規律、回復力、献身的な振る舞い。称賛に値するこれらの特質は、東北地方が復興するまで必要となる。

・敗戦で荒廃した国を勤勉さで再建し、阪神大震災や数多くの大災害から復興した際に見せた「力の宝庫」を信じてほしい。頑張ってと結んでいる。

同教授はオハイオ州立大で遺伝学を専攻。四九年に初来日以來、広島、長崎の被爆者を追跡調査し、放射線影響調査研究所副理事長も務めた。

●復興ではなく創造を

米倉誠一郎・一橋大学教授は、今の日本に必要なものは「楽観的な進取の精神」だと言う。かといって川崎製鉄の初代社長・西

山弥太郎氏の戦後復興の偉業を振り返る。

・西山は昭和二五(一九五〇)年に、千葉県に世界最新鋭の銑鋼鉄一貫製鉄所の建設を宣言した。当時の日銀総裁の一万田尚登はインフレの最中での計画に猛反対。マスコミは「太陽を素手でつかむ」と騒ぎ立てた。

・だが「超重要課題は設備の近代化だ」と宣言。一六〇億円の巨額の新工場建設を断行した。いざれ来る厳しい国際競争に勝つという明確な目標があった。

●大きな時代観

・その後、日本は一九六〇年代に向かつて高度成長に突入し、西山は時代をリードした。

・日本の復興に必要なものは「大きな時代観」だ。

・「神経に病んで、くよくよしていたら一歩も進めない。三日先の見通しは神ならぬ身の知るよしがない」という開き直りがあった。

・今の日本には技術もカネも人材もある。ただ欠落しているのは、時代観に基づいた決断力と「機に臨めば新たな考えもでてくる」という楽観的進取の精神だ。

●クリーンエネルギーの先進国に
大震災を経て日本が迎えるべき時代とは、クリーンエネルギー先進国になること。それに見合った「豊かな人間性を両立する社会」への価値転換だ。

・クリーンエネルギーは水力に加えて太陽光、太陽熱、風力、地熱など複数の組み合わせとなる。

・そのためには、勇気を持った企業家たちの行動と政府内に科学者やビジネスマンを糾合した戦略的組織の構築が必要だ。既得権や古いパラダイムを志向する人間をのさばらせない。

●楽観的な進取の精神

・今、日本に必要なものは「楽観的な進取の精神」だと言う。

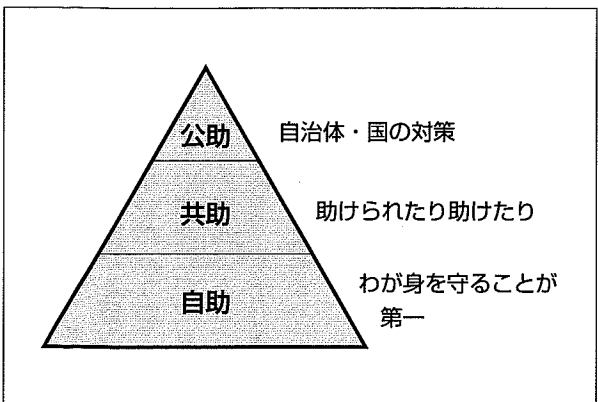
・日本が世界の最先端にとどまりたいのであれば、この震災を契機に低炭素社会実現のための投資や社会システムの大胆な投資をしなければならぬ。

・東北の一万弱の小中学校に、一つあたり二億円をかけて太陽光発電を進めても総額二兆円ですむ。日本が率先して義務教育機関に太陽光発電化を実施すれば、世界的モデルとなり見学者もあとを絶たないだろう。

・現代の「設備の近代化」とは、
こういうことなのである。〔中
央公論二三年五月号〕

●自助・共助・公助

災害対策は、自助・共助・公助の三要素からなる。まず人命。わが身を守る自助が第一。お互いが助け合い、手伝い合う。暮らしと生業を支え合う共助。そして全体の復興と支援を進める公助だ。



東北人がじつと苦しみに耐えて、秩序を守りながら立ち上がる姿に、内外から称賛の聲が上がっている。

日本国中、そして世界各国から寄せられた大きな支援に、人間としての美しさに大きな感動を覚えた。それに比べ、政府や東電の初動対応の混乱が公助パワーを弱め、今日の混乱と障害を招いていることが悔やまれてならない。

●運鈍根で生きる

鉱山王と呼ばれた古川市兵衛は、いつも運鈍根を唱え続けた。「運は鈍でないとつかめない。利口ぶってチヨコマカすると運は逃げてしまう。鈍を守るには根がなければならぬ」と。

災害は突然襲ってくる。その時の運、不運が人生を分ける。だが、日ごろの備えは怠ってはならない。日まして、人災は努力で防げる。日ごろの訓練のおかげで紙一重で難を逃れた例も多い。とっさの転機とカンには訓練で養える。運は出会った人との縁を生かせる人、明るく暮らす人についてくる。

鈍は図太く生きる鈍重さ。なるようになる。明日を信じて焦らず鈍行で生きる。そして復興を目ざし、コツコツ積み重ねて根をつめる根性が欠かせない。

一日も早く復興の日が訪れるよう祈っている。